

音声・音読による「読む力」「聞く力」の向上について

1 はじめに

長文読解に対して苦手意識を持つ生徒が多い。その理由としては、センター試験レベルの長文については短時間で長文を読むことに慣れていないこと、国公立二次・私大レベルの長文については、分量に加え、使用されている語彙数、文が難解で内容理解に対して困難を感じていることなどが考えられる。より速く正確に内容を理解するためには、単語力、文法力、構文把握力などの総合的な力が必要である。3年生のセンター試験対策が始まる時期に合わせ、リスニング・筆記の両方の力を効果的に高め、さらにライティング、スピーキング力の向上にもつなげることを目的として、次のような取組をした。

2 事前調査

200語程度のセンター試験レベルの英文を利用し、「英語授業改善のための処方箋」(金谷憲 著 大修館書店)で紹介されている方法を参考に、1分間に読むことができる語数を示す WPM(Words per Minute)を調査した。

- ① 200語程度のセンター試験レベルの英文を、全員同時に読み始める。
- ② 黒板に事前に書いておいた10秒単位の時間を消しながら、読み終えた時間を確認する。
- ③ 英文を見ないで、5問程度の問題に答える。
- ④ 答え合わせをして、次のようにWPMの計算を行なう。

$$\text{総語数} \div \frac{\text{時間 (秒)}}{60} \times \text{正解率} = \text{WPM}$$

3 目標設定

音声(CD)・音読により聞く力だけでなく、長文を速読する能力を高めたい。
→従来の指導に加え、音声や音読を効果的に取り入れた指導法の工夫をする。

4 仮説の設定

- ① 音声(CD)を利用して、英文を見ながら、意味のまとまりを把握し、音声の速度(ナチュラルスピード)に合わせて内容を理解すれば、聞く力だけではなく、読む力も身に付くのではないか。
- ② 内容理解後に英文を見ながら音読することにより、音読と同時に英文の内容確認ができ、理解がさらに深まり読む力も高まるのではないか。
- ③ 良質な英文を音読することにより、語彙力と、英語表現力が身に付き、話す力・書く力の向上にもつながるのではないか。

5 計画の実践

テキストとして、2年次から使用している、副教材の単語集の英文を利用して、次のとおり実践した。

<実践の方法>

- ① 授業の始めの時間(5分程度)を利用する。

- ・ 1時間あたり2～3項目ずつ取り組む。
 - ・ 1回目は英文を見ながらCD音声を聞く。
→CD音声の速度に合わせて内容を理解する。
 - ・ 2回目は英文を見ながらCD音声に合わせて声に出して読む。
→CD音声の速度に合わせて内容を理解しながら音読する。
- ②同時期にセンター試験対策の授業を実施する。(センター問題演習)
- ③効果を高めることができたかを調べる。
- ・ 最初にWPMをセンター試験レベルの英文で調べ、一定期間実施した後に再度確認する。(1回目11月、2回目1月)
 - ・ 実施後にアンケートを行い、どのように取り組めたか、効果があったかどうか確認する。

取組の姿勢については、個人差があり、アンケート結果にもあるように、意識して取り組めた生徒と、そうでない生徒がいた。声に出して読むということについては、授業中に1年次から取り組んできたが、3年次になり、難しい英文を扱うようになると、1、2年次と比べ音読に取り組む機会が減っていた。したがって、この時期に音読を再開することに対して、多少抵抗がある生徒もみられた。しかし、2年次から使用してきた教材を使用したため、復習の意義を理解し、多くの生徒が前向きに取り組んだ。

6 結果の検証

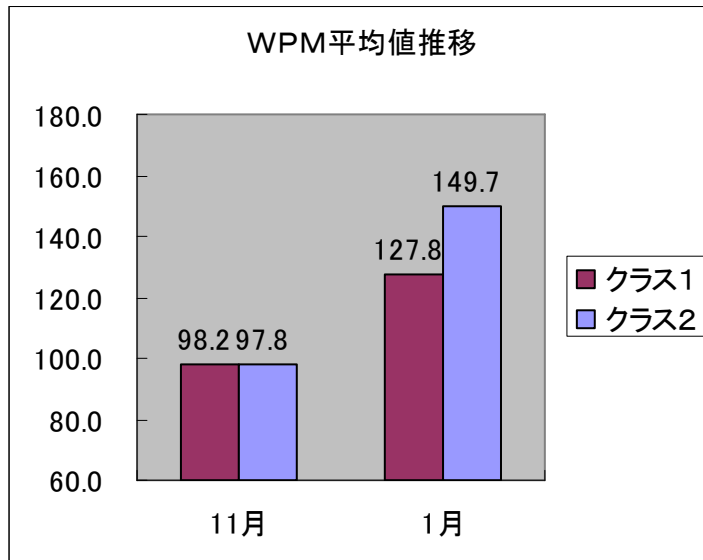
[実践の時期・内容]

- 11月 授業の初めの時間を利用し実践を開始する。(1回あたり英文2～3項目ずつ実施)
- ・ 英文を見ながら音声を聞く。
 - ・ 音声を聞き英文を見ながら声を出してパラレル・リーディングを実施する。
- 1回目のWPMを調査する。(2クラス対象)
- 12月 センター試験対策の授業を開始する。
- 1月 センター試験後に2回目のWPMを調査する。

[WPMの結果について]

11月と1月のWPMの推移は次のとおりであった。

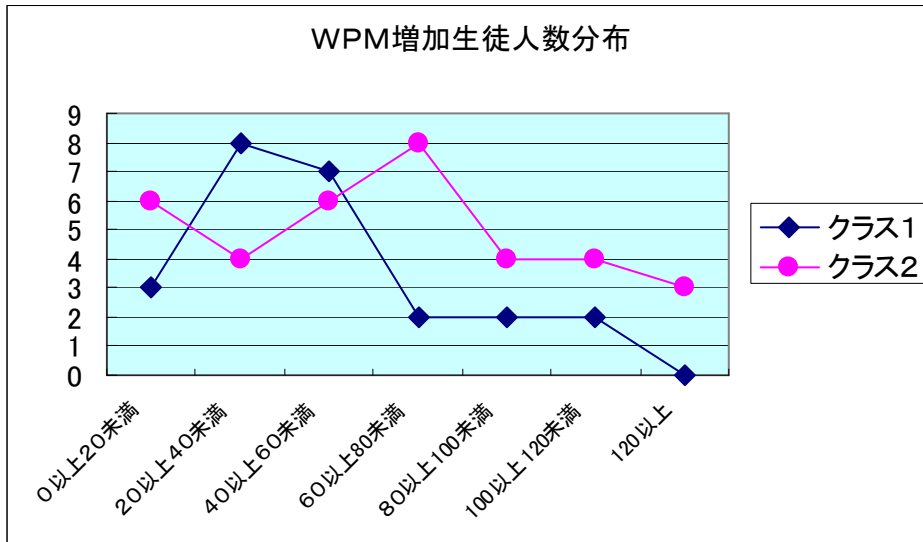
- クラス1 クラス全体で平均29.6語増加
語数増加者のみでは平均46.0語増加
- クラス2 クラス全体で平均51.9語増加
語数増加者のみでは平均62.4語増加



- 短期間の実施期間であり、音声を利用した音読以外に、センター試験対策の授業も実施したため音声・音読の効果のみによって効果が得られたというわけではないが、センターレベルの速読に関しては、かなりの指導の効果がみられることがわかった。
- クラスによっては、数値的な伸び率に若干差がみられるが、実施後のアンケート結果から、取組に対する意欲に差がみられることが要因の1つとして考えられる。
- WPMについては今回初めて取り組む生徒がほとんどであった。

次に、WPMの語数が増加した生徒の人数分布は次のとおりであった。

WPM増加語数	クラス1	クラス2
0語以上20語未満	3人	6人
20語以上40語未満	8人	4人
40語以上60語未満	7人	6人
60語以上 80 語未満	2人	8人
80語以上 100 語未満	2人	4人
100語以上 120 語未満	2人	4人
120語以上	0人	3人



2回の調査のうち、どちらか1回欠席した生徒のデータは数値から除いてあるため、全体の人数の合計に差があり、単純に比較することはできない。しかしながら、アンケート結果からわかるように、取組に対して全体的に前向きであったクラス2については、速読に関してかなりの指導の効果がみられる生徒が多くいることがわかる。

7 まとめ

今回は、効果の推移を調べる手段として、WPMのみを使用したため、速読についてのみの効果しか確認できなかったが、アンケート結果から、リスニングについても効果があったと考えられる。また、英文の中で単語を確認していくことを目的とした教材を使用したため、単語の復習の効果を感じる生徒が多くみられた。

感想のコメントの中で、「音声が入るので、音声と同時に読んでいると自然に速読ができるようになった。」「読む速さで理解しようと心がけていたので、速読力がついたと思う。」など、音声を利用した速読についての効果を実感することができた生徒もいた。また、一方で、「速くて難しかった。」などの感想もあり、音読に適した教材についても、検討が必要であった。

3年生の後半の時期にあたり、アウトプットの機会を設定することができなかったが、卒業後もそれぞれの進路先で、高校までに習得した英語の能力を、異文化間コミュニケーションの手段として活用する場面がさらに多くなると思われる。

異文化間コミュニケーションにおいて、自己理解、自己表現、他者理解のために中心的な役割を果たす言語が英語である。生徒が、高校までに習得したことを、今後の学習環境の中で活かしていけることを願う。